

前

入学試験問題

国語(B)

(配点八〇点)

平成十七年二月二十五日 九時三〇分～十二時一〇分

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この問題冊子は全部で十七ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答には、必ず黒色鉛筆(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 四、解答用紙の指定欄に、受験番号(第一面二箇所)、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 六、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
- 七、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白や裏面には、何も書いてはいけません。
- 八、この問題冊子の余白は、草稿用に使ってもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 九、解答用紙および問題冊子は、持ち帰ってはいけません。

受験番号						
------	--	--	--	--	--	--

上欄に受験番号を記入しなさい。

草稿用紙
(切り離さないで用いよ。)

第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

すべての道徳は、ひとが徳のある人間になるべきことを要求している。徳のある人間とは、徳のある行為をする者のことである。徳は何よりも働きに属している。有徳の人も、働かない場合、ただ可能的に徳があるといわれるのであって、現実的に徳があるとはいわれないのである。アリストテレスが述べたように、徳は活動である。ひとが徳のある人間となるのも、徳のある行為をすることによつてである。それでは、如何なる活動、如何なる行為が徳のあるものと考えられるであろうか。この問題は抽象的に答えられ得るものでなく、人間的行為の性質を分析することによつて明らかにさるべきものである。

人間はつねに環境のうちに生活している。かくて人間のすべての行為は技術的である。言い換えると、我々の行為は単に我々自身から出るものでなく、同時に環境から出るものである、単に能動的なものでなく、同時に受動的なものである、単に主観的なものでなく、同時に客観的なものである。そして主体と環境とを媒介するものが技術である。人間の行為がかようなものであるとすれば、徳は有能であること、技術的にタクエツ^aしていることではなければならぬ。徳のある大工というのは有能な大工、立派に家を建てることのできる大工であり、これに反してあるべきように家を建てることのできぬ大工は大工の徳に欠けているのである。徳をこのように考えることは、何か受取り難いように感ぜられるかも知れない。今日普通に、道徳は意志の問題と考えられ、徳というものも従つて主観的に理解されている。しかるに例えばギリシア人にとっては、徳はまさに有能性、働きの立派さを意味したのである。この見方はルネサンスの時代に再び現われた。徳は力であるということも同様の見方に属している。実際、人間の行為はつねに環境における活動であり、かようなものとして本質的に技術的であることを思うならば、徳を有能性と考えること、それを力と考えること¹でさえも、理由があるといわねばならぬ。行為は単に意識の問題でなく、むしろ身体によつて意識から脱け出ると

ころに行爲がある。従つて徳というものも単に意識に關係して考えらるべきものではないのである。芸術を制作的活動から出立して考察し、その一般の原理は美でなく却つて真理であるといったフィードレルは、芸術的に真であることは、意図の、意欲の問題でなく、才能の、能力の問題であると述べている。我々は道德的真理について、同じように、道德的に真であることは、単に意欲の問題でなく、有能性の問題であるといふことができるであらう。

尤も、行爲はすべて技術的であるにしても、すべての技術的行爲が道德的行爲と考えられるのではないであらう。固有な意味における技術は物の生産の技術であつて、かような技術的行爲はそれ自身としては道德的と見られないのが普通である。道德的といふ場合、それは物にでなく人間に、客体にでなく主体に、關係している。技術的行爲について徳が問題にされる場合においても、それは主体或いは人間に關係して問題にされるのである。ひとがその仕事において忠実であること、良心的であることは、道德的であるといわれる。そのとき問題にされているのは、彼の仕事でなく、彼の人間である。しかしながら他方、如何なる人間的行爲も物に關係している。我々自身或る意味では物であり、人と人との行爲的連関は物を媒介とするのがつねである。人間の徳を彼の仕事における有能性から離れて考えることは抽象的であるといわねばならぬ。

それのみでなく、技術の意味を広く理解して、人間の行爲はすべて技術的であると考えるとき、徳と有能性との密接な關係は一層明瞭になるであらう。従来技術といわれたのは主として經濟的技術である。かように技術というと直ちに物質的生産の技術を考えることは、近代における自然科学及びこれを基礎とする技術のヒヤクの發達、それが人間生活にもたらしたケンチヨな効果の影響のもとに生じたことである。しかしギリシアにおいて芸術と技術とが一つに考えられたように、一切の文化は技術的に形成されるものである。そして独立な主体と主体とは、客觀的に表現された文化を通じて結合される。主体と主体とはすべて表現を通じて行爲的に關係する。人と人が挨拶を交わすとき、その言葉はすでに技術的に作られたものである。挨拶は修辭学的であり、修辭学は言葉の技術である。そのとき、彼等がボウシをとるとすれば、そこにまたすでに一つの技術がある。一般に礼儀作法というものには技術に属している。技術的であることによつて人間の行爲は表現的になる。礼儀作法は道德に属すると考えられているように、すべての道德的行爲は技術とつながっている。礼儀作法は一つの文化と見られるが、一切の文化は技術的に作られ、主体と主

体との行為的連関を媒介するのである。経済はもとより、社会の諸組織、諸制度も技術的に作られる。自然に対する技術があるのみでなく、人間に対する技術がある。人間は自然的・社会的環境において、これに行為的に適応しつつ生活している。自然に対する適応と社会に対する適応とは相互に制約する。自然に対する適応の仕方が社会の組織や制度を規定し、逆にまた後者が前者を規定する。自然に対する技術と社会に対する技術とは相互に連関している。そして歴史的に見ると、近代社会における中心の問題は自然に対する技術であったが、それが産業革命となり、その後その影響から重大な社会問題が生ずるに至り、現代においては社会に対する技術が中心の問題になっているといえることができるであろう。

しかし道徳は外的なものでなく、心の問題であるといわれるとすれば、そこに更に心の技術というものが考えられるであろう。心の徳も技術的に得られるのである。人間の心は理性的な部分と非理性的な部分とから成っているとすれば、理性が完全に働き得るためには非理性的な部分に対する理性の支配が完全に行われねばならぬであろう。この支配には技術が必要である。人間生活の目的は非理性的なものを殺してしまうことにあるのではなく、それと理性的なものとを調和させて美しき^エタマシイを作ることであると考えられるとすれば、技術は一層重要になってくる。心の技術は物の技術と違って心を対象とする技術であるにしても、それは単に心のみ関係するものではない。この技術もまた一定の仕方で環境に関係している。即ち物の技術においては、技術の本質であるところの主観と客観との媒介的統一は、物を変化し、物の形を変えることによって、物において実現される、そこに出来てくるのは物である。心の技術においても環境が問題でないのではなく、ただその場合主観と客観との媒介的統一は、心を変化し、心の形を作ることによって、主体の側において実現される。かくして「人間」^エが作られるとき、我々は環境の如何なる変化に対しても自己を平静に保ち、自己を維持することができるのである。その人間を作ることが修養といわれるものである。修養は修業として技術的に行われる。しかしながら心の技術は社会から逃避するための技術となつてはならぬ。身を修めることは社会において働くために要求されているのである。修業はむしろ社会的活動のうちに行われるのである。我々は環境を形成してゆくことによって真に自己を形成してゆくことができる。いわゆる修業も特定の仕方において主体と環境とを技術的に媒介して統一することであるにしても、心の技術はそれ自身に止まる限り個人的である、それは物の技術と結び付くこと^オによって真に現実的に社会的意

味を生じてくるのである。

(三木清『哲学入門』)

[注] ○フィードレル——Konrad Adolf Fiedler(一八四一—一八九五) ドイツの哲学者。

設問

- (一) 「人間のすべての行為は技術的である」(傍線部ア)とあるが、それはなぜか、説明せよ。
- (二) 「徳を有能性と考えること、それを力と考えること」(傍線部イ)とあるが、どういうことか、説明せよ。
- (三) 「技術的であること」によって人間の行為は表現的になる」(傍線部ウ)とあるが、どういうことか、説明せよ。
- (四) 「『人間』が作られる」(傍線部エ)とあるが、どういうことか、説明せよ。
- (五) 「真に現実的に社会的意味を生じてくる」(傍線部オ)とあるが、なぜそのように言えるのか、全体の論旨に即して一〇〇字以上一二〇字以内で述べよ。(句読点も一字として数える。なお、採点においては、表記についても考慮する。)

(六) 傍線部 a・b・c・d・e のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a タクエツ

b ヒヤク

c ケンチヨ

d ボウシ

e タマシイ

草
稿
用
紙
(切り離さないで用いよ。)

第 二 問

次の文章は、ある事情で身を隠して行方知れずになつた姫君の一行(姫君・侍従・尼君)を、長谷寺の観音の靈夢に導かれた男君(中将)が、住吉社で捜しあてる場面である。これを読んで後の設問に答えよ。

さらぬだにも、旅の空は悲しきに、夕波千鳥、あはれに鳴きわたり、岸の松風、ものさびしき空にたくひて琴の音ほのかに聞こえけり。この声、律に調べて、盤渉調に澄みわたり、これを聞き給ひけん心、いへばおろかなり。「あな、ゆゆし。人のしわざには、よも」など思ひながら、その音に誘はれて、何となく立ち寄りて聞き給へば、釣殿の西面に、若き声、ひとり、ふたりが程、聞こえてけり。琴かき鳴らす人あり。「冬は、をさをさしくも侍りき。このころは、松風、波の音もなつかしくぞ。都にては、かかる所も見ざりしものを。あはれあはれ、心ありし人々に見せまほしきよ」とうち語らひて、「秋の夕は常よりも、旅の空こそあはれなれ」など、をかき声してうちながむるを、侍従に聞きなして、「あな、あさまし」と胸うち騒ぎて、「聞きなしにや」とて聞き給へば、

尋ぬべき人もなぎさの住の江にたれまつ風の絶えず吹くらん

と、うちながむるを聞けば、姫君なり。

「あな、ゆゆし。仏の御験は、あらたにこそ」とうれしくて、簀の子に立ち寄りて、うち叩けば、「いかなる人にや」とて、侍従、透垣の隙よりのぞけば、簀の子に寄り掛かり居給へる御姿、夜目にもしるしの見えければ、「あな、あさましや、少将殿のおはします。いかが申すべき」と言へば、姫君も、「あはれにも、おぼしたるにこそ。さりながら、人聞き見苦しかりなん。我はなしと聞こえよ」とあれば、侍従、出であひて、「いかに、あやしき所までおはしたるぞ。あな、ゆゆし。その後、姫君うしなひ奉りて、慰めがたさに、かくまで迷ひありき侍るになん。見奉るに、いよいよ古の恋しく」など言ひすさびて、あはれなるままに、涙

のかきくれて、物もおぼえぬに、中将も、いともよほすこころぞし給ふ。「侍従の、君のことをばしのび来しものを、うらめしくも、のたまふものかな」と、「御声まで聞きつるものを」とて、じやうえ浄衣の御袖そでを顔に押しあて給ひて、「うれしさもつらさも、なかにこそ」とのたまへば、侍従、ことわりにおほえて、「さるにても、御休みさぶらへ。都のこともゆかしきに」とて、尼君に言ひあはすれば、「ありがたきことにこそ。たれもたれも、ものあはれを知り給へかし。まづ、これへ入らせ給ふべきよし、聞こえ奉れ」と言へば、侍従、「なれなれしく、なめげに侍れども、そのゆかりなる声に。オ旅は、さのみこそさぶらへ。立ち入らせ給へ」とて、袖をひかへて入れけり。

〔住吉物語〕

〔注〕 ○律——邦楽の旋法の一つ。秋の調べとされる。

○盤渉調——律の調子の一種。

○をさをさし——ここでは「ろくにないじめない」の意。

○少将殿——姫君たちは、この年の正月に、男君が少将から中将に昇進したことをまだ知らないため、こう呼んだ。

○おぼしたるにこそ——「少将さまは、わたしのことを思っただけでいらつしたのね」の意。

○浄衣——潔斎のために男君が着用していた白い装束。

○そのゆかりなる声に——「姫君のゆかりである私の声をお尋ね下さったのですから」の意。

設
問

- (一) 傍線部ア・イを、必要な言葉を補って現代語訳せよ。
- (二) 傍線部ウについて、何を何と「聞きなし」と思ったのか、簡潔に記せ。
- (三) 傍線部エ「うれしさもつらさも、なかばにこそ」とあるが、なぜそのように感じたのか、簡潔に説明せよ。
- (四) 傍線部オについて、「さのみ」の「さ」の内容がわかるように言葉を補って現代語訳せよ。

草
稿
用
紙

(切り離さないで用いよ。)

第三問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

君能納^ク諫^レ、不^レ能^ハ使^ニ臣^ヲ必^ズ諫^ニ、非^ニ真^ク能^ル納^レ諫^ヲ之^ニ。夫^レ君之大^ハ、天也、其尊^ハ、神也、其威^ハ、雷霆也。人之不^レ能^ハ抗^シ天^ニ、触^レ神^ニ、忤^ニ雷霆^ニ亦明^ラ矣^{ナリ}。

聖人知^ル其然^ル。故^ニ立^テ賞^ヲ以^テ勸^ム之^ヲ。伝^ニ曰^ク、「興^ハ王^ハ賞^ニ諫^ニ臣^ヲ。」是也。猶^ホ懼^ミ其^ノ

選^{ゼン}奕^{ゼン}阿^ア諛^ユ使^ニ一^モ日^ヲ不^レ得^レ聞^ク其過^ヲ。故^ニ制^シ刑^ヲ以^テ威^レ之^ヲ。書^ニ曰^ク、「臣下不^レ正、

其刑墨。」是也。人之情、非^ズ病^ミ風^ヲ喪^レ心^ヲ、未^レ有^ニ避^レ **A** 而就^レ **B** 者。

何^ヲ苦^シ而^シ不^レ諫^メ哉。賞^ト与^テ刑^ヲ不^レ設^ケ、則^チ人之情、又何^ヲ苦^シ而^シ抗^シ天^ニ、触^レ神^ニ、忤^ニ

雷霆^ニ哉。自^リ非^ザ性^ニ忠^ニ義^ニ、不^レ悦^バ賞^ヲ、不^レ畏^レ罪^ヲ、誰^カ欲^ス以^テ言^ヲ博^ク死^ヲ者^ヲ。人君又

安^ク能^ク尽^テ得^ニ性^ニ忠^ニ義^ニ者^ヲ、而^シ任^ゼ之^ニ。

(『嘉祐集』による)

- [注] ○雷霆——かみなり。 ○忤——逆らう。 ○伝——『国語』のこと。 ○興王——国を興隆させた王。
 ○選奘——びくびくと恐れるさま。 ○阿諛——おもねる。 ○書——『書経』のこと。 ○墨——入れ墨。
 ○病風——精神を病んでいること。

設問

- (一) 「懼_レ其選奘阿諛使_二一日不得聞_レ其過_一」(傍線部 a)とあるが、どういうことか、二つの「其」がそれぞれ何を指すかわかるように、説明せよ。
- (二) 「書曰、『臣下不_レ正、其刑墨。』是也」(傍線部 b)を、平易な現代語に訳せ。
- (三) 本文中の空欄 **A**・空欄 **B** に入る最も適当な一字を、それぞれ文中から抜き出せ。
- (四) 「自_レ非_二性忠義不_レ悦_一賞不_レ畏_レ罪、誰欲_二以_レ言博_レ死者_一」(傍線部 c)を、平易な現代語に訳せ。

草
稿
用
紙

(切り離さないで用いよ。)

草
稿
用
紙

(切り離さないで用いよ。)